

白山ふるさと文学賞

第二回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈母へのおもいに関する作文〉

中高校生の部 優秀賞

母への思い

鶴来中学校一年

ながい 永井

りこ 梨瑚

受賞の言葉

自分が書いた「母への思い」が入賞してとてもうれしかったです。

これを通して、作文を書くことに自信をもてることができました。

自分の作文を読んでもらうことで、母と
いう大切な存在のことについて考えてほ
い
い
です。

私が今、幸せな日々を過ごしているのは、母のおかげだと思います。もちろん家族全員のおかげでもあるけど、一番私のことを理解して支えてくれたのが、母でした。

私はよく、母とケンカをします。中学生になってからも、勉強以外にも部活動が加わり、毎日が忙しい日々です。それに勉強と部活の両立も難しいです。そんなことにイラだって、私は母にあたってしまうことがあります。しかし、母もストレスがたまってないわけではないと思います。野球をやっている高一の兄のために、誰よりも早く起きて、お弁当を作ったり、毎晩汚れたユニフォームを洗ったりしています。他にもそうじ・家族全員のご飯を作ったりなど、私より忙しいのに文句一つさえ言わない母を見て、自分はなんてバカなことをしていたんだと、反省しました。自分のためになんばって何かをやってくれている人に、あたってしまったなんて絶対にやってはいけないことだと気づいたからです。私はそのことに気づいたとき、母への感謝の気持ちがおみ上げていました。母に何かをしてもらうのは、当然だと思っていたけれど、当然ではないことを知りました。一番しよげきをうけたのが母という存在が、必ずしもそばにいないとは限らないということです。今まで私は、一つの家族に一人母という存在がいるものだと思っていました。しかし、東日本大震災があつてニュースで見たり聞いたりするのは、グチャグチャになった家や泣いている人です。自分以外、家族全員がなくなってしまう人は、たくさんいると思います。私より小さい子も、こんなひどい目にあつてます。見てて、かわいそうだなと思う。けれどその人・その子たちの気持ちには、私が思つたことよりもっと悲しい思いだと思います。そう考えていると、ニュースを見ててどう感じとればいいのか分からなくなつていました。その時、母が「この人（子）たち、強くなるね。」と問いかけてきました。私は、

「え？」

と答えました。いや、答えましたではなく、答えようがなかったと、言

つた方がいいと思います。母の言つた言葉が全然理解できなかったからです。でも、震災が起きてから二年が経つた今は分かります。ニュースに出ていた子ではなかったけれど、子供が笑っていました。家族を失っているにもかかわらず、その子は過去をバネに、必死に前へすすもうとしていました。その瞬間、母に言われたことを思い出しました。そして、やつと理解できました。あれは悲しい過去をそのままにするのではなく、バネにして前にすすむ。つらいことも乗り越えなきゃいけない。という意味だと思う。そして、それは私にも言ってくれたことだと思う。今から大人になるにつれ、つらいこと・悲しいことが必ずおこる。それでも前にすすまないと、良いことうれしいことなんてこないから、がんばつて前にすすむんだ。と、母からの応援メッセージに思います。母は、また私に大事なことを教えてくれました。

私は今まで数えきれないほど大切なことを母から教わってきたと思います。母がいなかったら、私はこの世に生まれてきてなかったし、最高の仲間になんかできなかったし、本当母に感謝しています。

中学校に入ってから、部活があります。いつもお弁当を作ってくれたり、Tシャツを洗ってくれたりそのおかげで部活が出来るので、私はうれしいです。でも、Tシャツなど洗ったりしないと部活が出来ません。母が毎日洗ってくれるから出来るわけだから、これがあたり前ではなく毎日母には感謝しなければ、いけないと思います。私の中で、一生の支えになるのは母だと思うから、そんな大切な人に傷付けることを言ったりしたら、ダメだと思います。